

佐藤昌康先生 追悼の詞

熊本大学医学部生理学第二講座

小川 尚



生理学会特別会員・佐藤昌康先生（ブレインサイエンス振興財団理事長・日本味と匂学会名誉会員・熊本大学名誉教授）は、平成9年8月11日夜胆道癌の為、武蔵野市内の病院で逝去されました。享年77歳。

佐藤先生のご業績として特記すべきことは、世界で初めて感覚器より受容器電位を記録してその後の感覚刺激受容過程研究に模範を示されるとともに、日本の味覚研究を国際的なものに育てられたことにあります。

佐藤先生は大正8年長崎県大村市において、佐藤家の3男として誕生されました。昭和17年東京帝国大学医学部をご卒業後、直ちに海軍軍医に任官されました。東大学生時代、橋田邦彦教授の輪読会に参加して将来生理学の研究に進みたいと決心されました。終戦とともに、家族の強い反対を押し切って上京し東京大学医学部の若林勲教授の門を叩かれました。昭和27年第2回ブリティッシュ・カウンシルの奨学金を得てロンドン大学生理学教室に留学され、J. A. B. グレイ博士と世界で初めてパチニー小体から受容器電位を記録されました。この記録には日本で修得した単一線維記録法が大いに役に立ったそうです。

昭和29年帰国し、熊本大学医学部に新設された生理学第二講座教授として赴任されました。熊本に到

着するや阿蘇山に登り生理学研究の中心地ロンドンへは東京も熊本も距離的には変わらないと思われたそうで、当時の先生の意気が伺えます。教室開設時、伊藤正男現東京大学名誉教授、石河延貞現宮崎医科大学名誉教授の方々が助手におられました。佐藤先生がイギリスより購入してこられたブラウン管などを用いてオッシロスコープを作製し、当時日本に導入されたばかりの微小電極を用いて電気生理の実験を始めました。

先生は帰国に当り、味細胞から受容器電位を記録したいと考えられ、何度か試みられましたが上手くいかず、単一線維法をもちいた哺乳動物の末梢味覚情報の解析に移され、味細胞受容器電位の研究は昭和40年代半ばに再開されました。また、刺激受容の分子機構にも興味をもたれ、生化学的手法で甘味受容タンパク分離をも試みられました。何れの研究でも幾多の業績を上げられました。熊本大学に赴任された当時、ロンドン大学とは比較にならない研究設備の悪さなどからパチニー小体の研究を諦めておりましたが、昭和34年から1年間米国に出張後同研究を再開されました。しかし、この間の業績をチバシンポジウム(1966)に発表されたのを機会に終了しておられます。

Zotterman 主催の国際嗅覚味覚シンポジウム(1963)に招待されて以来、札幌で開催された第11回

同シンポジウムまで連続して参加され、世界の味覚研究をリードしてこられました。一方、昭和43年、河村洋二郎大阪大学歯学部教授(当時)・高木貞敬群馬大学医学部教授(当時)らと「日本味と匂のシンポジウム」(現在日本味と匂学会に発展)を設立し、味覚・嗅覚研究の発展に寄与されました。

昭和51年、22年間勤められた熊本大学を50歳台半ばで辞し、東京都神経科学総合研究所の所長に就任され研究所の管理運営に腐心され、昭和61年以来お亡くなりになるまでブレインサイエンス振興財団の理事長として多くの研究者の表彰や研究助成、国際学会開催の援助などを行われました。

熊本大学時代、学生を集めて輪読会を催されまし

たが、その中から多くの学生が佐藤研究室の門を叩き、門下生から多数の研究者が輩出しました。先生は何時もパイプを加え訥々と話されましたが、学生には人気があり、放課後学生の要望に応じて何度かパチニー小体からの受容器電位発見の様子などについて話されました。

8月13日正午、文学青年であった佐藤先生がよく訪れになった三鷹禅林寺(森鷗外、太宰治の墓所で有名)のホールで告別式がしめやかに行われ、最初の門下生である伊藤正男先生が弔辞を供えられました。

心から、先生のご冥福をお祈りします。

合 掌